若尾政希著『安藤昌益からみえる日本近世』

（東京大学出版会・二〇〇四年）

山本眞功

一

本書は、著者の若尾政希氏が愛知教育大学に提出した卒業論文で後に二三歳の折りに同大学の日本思想史研究会が編集して刊行した論集の中に収めた処女論文を第一章に置き、四〇歳を過ぎた二〇〇一年と二〇〇二年にそれぞれ『歴史評論』『歴史学研究』誌上に掲載した論考を終章とする構成の書物である。巻末に著者によって付された「初出一覧」を目次に対応させて記すと、本書の体裁は左記のようになっている（初出題や収録誌、発行主体や発行年等については、括弧に入れて記した）。

序　書き下ろし

第一章　昌益の学問否定の本質（「安藤昌益の学問否定の本質」『日本思想史の試論　一九八二年・一九八三年』、愛知教育大学哲学教室内日本思想史研究会編、みしま書房、一九八四）

第二章　昌益の学問否定と秋田藩の農民政策（「秋田藩の農民政策と安藤昌益の学問否定」『季刊日本思想史』二九、特集「地域からの思想史」、田崎哲郎・三宅正彦編、ぺりかん社、一九八七）

第三章　天変地異の思想――昌益の天譴論と西川如見（「天変地異の思想――安藤昌益の天人相関説と西川如見」『日本文化研究所研究報告』二六、東北大学、一九九〇）

第四章　昌益の本草学――肉食をめぐって（「安藤昌益の本草学――肉食をめぐって」『日本文化研究所研究報告』二五、東北大学、一九八九）

第五章　延享期昌益の思想――『博聞抜粋』の基礎的研究（「延享期安藤昌益の思想――『博聞抜粋』の基礎的研究」『日本文化研究所研究報告』二八、東北大学、一九九二）

第六章　昌益の思想形成と「太平記読み」（「安藤昌益の思想形成と「太平記読み」」『日本歴史』五八三、一九九六）

終　章　昌益からみえる近世社会（一「政治常識の形成と『太平記』」『歴史評論』六一一、二〇〇一。二「近世の政治常識と諸主体の形成」『歴史学研究』七六八、青木書店、二〇〇二）

あとがき

索引（事項・人名、研究者名）

一瞥して気付かれることと思うが、書き下ろしの「序」を除いた八点の既発表論文はほぼ発表順（第三章と第四章のみが逆）に並べられている。それは著者が自らとこの研究対象との関わりあいの経緯を大切なものと考えているがためであるようだ。本書の「序」で著者は、次のように語っている。「こういうと

変に聞こえるかもしれないが、私は昌益を通して思想史研究について数多くのことを学んできた。昌益はその学問修得の過程等がまったくわからないために、私は昌益の著作の語句にこだわり、その語句を載せた書物はないかと探索し、いろいろな書物を読まざるをえなかった。もし、昌益に挑まなければ、（本書で扱った）音韻学とか本草学、医学、天文学、暦学、そして「太平記読み」等々に私が関心をもつことは決してなかったであろう。今にして思えば、昌益が読んだ書物を読み、昌益が学んだ学問を学ぶことを通して、私はいわば昌益の思想形成過程の一端を追体験していたのかもしれない」（xiv～xv頁）。

我々は著者が約二〇年にわたって「昌益の思想形成過程の一端を追体験」して来た過程を、本書においてさらに〝追体験〟することとなる。以下、それをたどってみよう。

二

冒頭第一章に置いた論において、著者は昌益の「学問の起源は、易と仏教である」（七九頁）とする立場に着目し、「昌益がどんな書物を読んで易を学んだのか」（三頁）、そして「仏教に関する知識をどのように得た」（九頁）のかを、稿本『自然真営道』巻四～八の検討によって明らかにしようとしている。それは昌益の主張を、彼の生きた時代に眼にすることが可能であったそれぞれの分野の書物群の主張とつきあわせる作業によってである。著者はこのほとんど気の遠くなるような作業を、本書に収録したほぼ全編において行っている。

そうした作業の結果として、第一章においてまず中心的に取り扱われるのは、昌益によって展開される音韻に関する議論である。ここで著者は、昌益が「易は、中国の学問の始めであり」「文字とそれに伴う字韻を創始し」、「仏教は、天竺の学問の始めであり、文字とそれに伴う字韻を創始した」としたこと、両者の中国社会における接触が「漢字の音である漢音・呉音の分立と唐音成立のきっかけとなり」「韻学と詩学」の隆盛といった「中国の学問」への大きな影響となってあらわれたという主張をしたことを取り上げた上で、「昌益によれば、あらゆる学問は文字によって、伝えられる以上、学問に字韻はつきものである」が、「昌益は、自然に備わる韻道の立場に立って、口中の韻のみを考察して作られた字韻を否定し、それによって、同時に、あらゆる学問を一挙に否定し去るのである」と結論付けている（七九～八〇頁）。そして、その否定を可能にした論理として「転定・日月星辰宿・穀・人は、自然一気の運動によって形づくられるとともに、自らこの一気を具有する」という「万物生成論」を取り上げている（六六頁）。「人の言語、声音韻」は人の「臓腑にそなわる自然一気が運動することによって」生じるというこの主張（同前）が、「医を生業とした」（六九頁）昌益であったからこそなされ得たものであることは見やすい道理であろう。

だが、こうした「万物生成論」は昌益においてどのようにし

て獲得形成されたものなのだろう。このことを検討する作業は五年後に書かれた第四章の論の中で、昌益の本草学受容の実相を探る形で集中的に行なわれているのであるが、第二章に置かれた論においてもこの作業は異なる形で試みられている。著者は第二章の中で「医を生業とした」者としての昌益の自己形成過程の解明に向かっている。この論は、当時の「医書の経典」とされていた『内経』に関する昌益の理解の内実の分析を中心としたものである。著者は、昌益が刊本『自然真営道』において「『内経』医学の根本は運気論」としている点に着目し、彼が「どういう書物を介して運気論を学んだ」かを明らかにしようとする（九九～一〇〇頁）。この作業も先の論と同様に当時彼の眼に入り得た書物群の主張とのつきあわせである。その結果著者は、明の張介賓の著作『類経』こそが「運気論」を含めた「『内経』医学に関する昌益の知識の源泉」（一〇三頁）であることを探り当てる。そして、その『類経』の立場を批判克服してゆく過程から形成されて来るものの一つが「音韻を万物生成論から説き及ぶ発想」（一一六頁）であったとしている。さらに著者は、昌益が『類経』に学んだ「運気論」の批判克服の中から、一つの社会思想を形成してゆく過程を跡付ける。それは差別的な「君臣上下関係を正当化するいわばイデオロギー」として機能する「君相二火」の考え方（一一一頁）を批判することで獲得された、昌益の上下身分秩序を不当とする社会思想確立への道筋である。著者は張介賓著『類経』は「昌益の医学理論の源泉」であるばかりでなく、「昌益の最も重要な思想的基盤の一つ」であったと結論付けている（一一六頁）。

三

この「運気論」との出会いが、著者に第三章を成す論を書かせている。著者はそこで「昌益が思想形成の過程で真に対決せざるをえなかった既成の思想」（一二九頁）の一つとして「天道思想」を取り上げ、その受容と克服の有り様を明らかにしようとする。それは「天道思想」の重要な構成要素である「天譴論」に関して昌益が主張した「独自の天譴論」の形成過程を「天運地気（運気）」を論じた暦に着目して解明しようという試みである（一三六頁）。著者は「昌益の著作と推定されている『暦大意』上・『暦之太意』中位下」（同前）の説は、西川如見の「『教童暦談』を下敷きに、語句の補訂・削除により、そこに自己の見解を織り込むという手法で自説を展開」（一六七頁）したものであることを、それらの書物を細かくつきあわせることで示してゆく。そして、この暦学に関する著述がなされた時期の昌益（「確龍堂正信」の著述号を使用していた時期）は、「天譴論により領主層の意識を喚起し体制の立て直しをはかる」（一七一頁）べきとする内容の社会思想を形成していたとする。だが、著者はこの章の最後で「宝暦期に入ると」昌益の「社会思想は大きく転換した」と述べる。「仁政を要請する天譴論から「法世」否定の天譴論へ」である。「しかもこれはわずか数年

の間になされた」。著者はそれが何を契機にどのようにしてであったのか、という問いを発している（一七四頁）。

そのことを問題とする前提として、もう一つ別の角度から著者の言う「確龍堂正信と名乗った時期」（三〇六頁）の昌益を扱ったのが、第五章に置かれた論考である。この章の論は、具体的には著者が『博聞抜粋』と総称する「昌益の高弟神山仙庵の子孫の家に伝えられた資料」（二四八頁）をめぐって展開される。著者は「『博聞抜粋』所収の各条の典拠を一つひとつ調査」（二四九頁）した上で、「『博聞抜粋』の編者が確龍堂正信安藤昌益であることは確実」であるという立場を取り（二五五頁）、この「資料」のほとんどの条の典拠を『太平記大全』という書物に求めることが出来るとしている（二五一頁）。そして、先に見た「正信時代の昌益」（二五七頁）の社会思想、特に「昌益の天道思想にもとづく政道論は、『大全』（『太平記』本文・〈評〉）の政道論と近似しており、『大全』の影響を受けたと推定することができる」（二六四頁）と結論付けている。

しかしながら、この第五章の論においても第三章において示された問い、すなわち著者の言う昌益の社会思想の「わずか数年の間になされた」とされる大きな転換の契機やその実相は示されないままである。のみならず続く第六章においても、著者は昌益が後に「確龍堂良中」という著述号のもとに展開した極めて特色のある社会変革論形成過程の徹底した解明に向かうことなく、「昌益の政治・社会思想形成の一応の道筋」について、「もちろん粗筋であって昌益の思想形成の謎をすべて解き明かしたというにはほど遠く、いまだ試案にすぎない」としながらも、「筆者はすでに一つの見通しを述べた」とし、「今後も、昌益が手に取り精読した書物を掘り起こす地道な基礎的作業を根気よく継続していかねばならない」と述べるだけで（三〇六～〇七頁）、この問題をどのようにして解いてゆこうと考えているかについての見通しは示さない。それはおそらく未だこの問題を解明するための鍵となる「書物を掘り起こす」に到っていないがためでもあろうが、私にはその実質的な理由は、第五章を成す論の段階で著者が『太平記大全』に収録されている『太平記評判秘伝理尽鈔』（以下『理尽鈔』と略記）という書物に出会ってしまったがためであるように思われる。

第六章に置かれた論は、その『理尽鈔』と昌益の主張をつきあわせることで、これが「昌益の学問形成・思想形成に決定的な影響を与えた書物であり、昌益の思想形成に欠くことができない、最も重要な思想的基盤の一つだといえる」（三〇五頁）としているが、第五章の論が発表された一九九二年からこの論に到るまでのほぼ四年の間に、著者は昌益研究を脇に置いて、数編の『理尽鈔』を主要な素材とした論考を公にしている。そして、この第六章の論に続けて、さらに数編の『理尽鈔』にかかわる論考が示され、それらは本書に先立って『「太平記読み」の時代』（平凡社、一九九九）という一書にまとめられている（著者自身もことわっているように、第六章の論はこの書にも収録さ

れている)。この書をすでに眼にしている者にとっては、本書の第六章以下、終章や序、あとがきの論は著者の研究上の主張として馴染みのものであろう。ただし、著者は終章において、「確龍堂良中」を名のるようになってから以後も含めた昌益の思想の全体像にふれた論を展開しようとしている。だが、それは第六章までの論に比べると、いかにも駆け足のものである。

本書はその意味では、もちろん安藤昌益研究の書ではあるのだが、重点は昌益の思想の全体的な構造の解明よりは、むしろ著者が若年の折りより「昌益の思想形成過程の一端を追体験」して来た中で『理尽鈔』という書物にどのようにして出会ったのかを示すことに置かれたものとなっている。著者の昌益研究は中断された状態にあるように思われる。私には本書の表題自体がそのことを示しているように受け取れるのである。

四

本書が発している声に耳を傾け、著者の昌益研究の跡の〝追体験〟を試みた結果、私が聞き取ったことの概要は以上のようなものであるが、この聞き取りは、かなり骨の折れる作業であった。本書からは大量の〝雑音〟や〝奇音〟が発せられているからである。私の評するところの〝雑音〟〝奇音〟について、以下述べておきたい。

本書は各章末尾に著者の手になるかなり長文の「コメント」を配すという珍しい形をとっている。私の言う〝雑音〟と〝奇音〟は主にこの中から発せられて来る。各章「コメント」において著者はまずそれぞれの論が成った折々のことを回顧する。そして、自身の一つ一つの論考が現段階において持つ研究史上の意義を自ら語ろうとしている。それは、あたかも自身の論はこのように読むべきだと、読み手にあらかじめ読む枠組みを設定し、そのことによって著者の期待する自論への評価を導こうとしているかの如くである。自らが発表した論文がどのように読まれるかは、本来的に読み手に委ねられるべきものであろう。それぞれで論じられた事々に関する研究史上の意義も、読み手によって測定され評価されてゆく。それが論文というものを書きそれを公にするという世界に身を置く者にとっての基本原則というものであって、研究史上の意義は自らの口で語るようなものなどではない。本書は読み手による評をあらかじめ拒む姿勢をとっていると言わざるを得ない。

しかも、著者は自らの論考の研究史上の意義を語るにあたって、多くの私信を援用している。それは回顧にことよせてなされているのだが、これも私にとっては〝雑音〟の一つであった。そもそも誰がどのような評を自身の論に対して寄せて来たかなどということは、自らの胸の内にしまっておけばよいことなのであって、ことごとしく公にするような事柄ではない。加えて言えば、私信による評価というものは、公にされないことを前提として、当の相手を目の前にしていないという条件のもとに書かれるところから、その内容や表現は少なからず割り増しし

たものになりがちであろう。本来的にそうした傾向を持ちやすい自身の論に寄せられた私信による評を公開することには、極めて慎重な姿勢を要するだろう。特にそれが自らの論への賛意が示されたものと考えられる場合は尚更である。

著者の行なっている私信の援用には、そうした慮りは私の見る限りひとかけらも認められない。むしろなされているのは逆のことである。著者はそれら私信の多くを、自らの主張の正しさとその意義を証するものとして活用している。それは人によっては、著者がそれら私信によって自身の成した論の権威付けを行なおうとしていると疑うかもしれない程である。賛意を示した私信の発信者として名前があげられるのは、故家永三郎氏を始めとする思想史家や著名な歴史学者達である。もちろん著者は、批判を述べて来た私信をも示している。だが、その引き方は、私には多く弁明のためになされているように思われる。そうした例の一つが、故丸山眞男氏から第三章の論に対して寄せられたとされる批判文への対応である。著者は家永氏からの賛辞を含む私信を紹介した後、「他方、丸山真男氏からはいつもの賛辞とは異なり、「……」と批判の言葉をいただいた」（丸山氏の私信の内容は著者によってすでに示されてはいるのだが、私としては丸山氏の御遺族の許可があって公にされたものであるかどうかを確認するすべもないので、ここに引くことを差し控え、点線表記とした。なお、傍点は山本の付したものである。以下同様）とし、その批判に対して「これは、直接には私が「丸山説の克服の過程」として研究史を叙述したことに対する批判であり、私は、これ以後、「複線」的アプローチ、思考法を意識するようになった。丸山氏のおかげである」という謝辞を述べている（一九二頁）。批判文も自説のためにやはり活用されているのである。

こうした私信の援用の仕方に見られるような著者の無邪気なと言うか、何と言うか、何とも言いようのない姿勢は、「コメント」の中でだけではなく、本書のいたる所で私が〝奇音〟と表現したものを発生させている。先に引いた丸山氏の批判文への対応の記述の中で私が傍点を付した箇所の物言いも、そうした〝奇音〟の一つなのだが、この種の物言いは他の箇所においても枚挙の遑もない程になされている。典型的な例を示してみよう。終章の「コメント」の中で「終章の二」についてふれた文章である。「お読みいただければわかるように、この論文を通して何か新しいことを実証しようとするものではない。これまで私が行なってきた地道な研究、すなわち昌益の思想的基盤の掘り起こしの成果と、昌益研究から派生して一九八〇年代末から精力的に取り組んできた「太平記読み」研究の成果とを踏まえて執筆したものである」（三七六頁）。ここで私が傍点を付した箇所の表現は、私の日本語の感覚では通常は自身の仕事を語る際には用いない種類のものなのではないかと思う。それらは、いずれも他者の営為への肯定的で好意的な評価を示すものとして発せられる種類の言葉なのであって、自身の仕事に対してこ

の種の表現を自ら用いることは、世間に向かって臆面もなく自画自賛を行なっているととられても仕方がないのではないかと思う。人によっては「執筆」という言い方でさえ、厳密に言えばその種の表現だとするかもしれないのである。

読み進めれば進める程に増してくる〝雑音〟〝奇音〟に違和感をつのらせながらもようやく本書を読み了えた今、私はもう一つ別のことに対する違和感に囚われてしまっている。それは、著者が「序」や「あとがき」において展開している「思想史とは何か」（ii頁）という論にかかわってである。著者は「序」において「「人の意識・思想に焦点をあわせた歴史研究」を、私は思想史研究と呼んでいる」（ii～iii頁）とし、「歴史学としての思想史研究」（xv頁）という表現さえ用いている。「思想史研究」は「歴史学」に含まれているというこの把握に対しては私自身違和感を持つし、本会の会員諸氏からの少なからぬ異論も予想される。これについては、本学会としても徹底した議論がなされてよい事柄なのではなかろうか。

本書は、「思想史とは何か」という問題を論議する上で、たたき台とするに恰好の書物なのではないかと考える。

（玉川大学助教授）

松田京子著
『帝国の視線――博覧会と異文化表象』
（吉川弘文館・二〇〇三年）

昆野伸幸

一

これまで自明のごとく通用したグランドセオリーが崩壊しつつある今日、様々な新しい方法論に基づいた刺激的な研究が世に送られている。とくに国民国家論の隆盛は目覚ましく、それに対する異論も提出されてはいるものの、近代の諸学知が国民国家を成り立たせる重要な装置であることは間違いない。そして、今日の研究者の構築する学知もまた無意識的に国民国家内部に止まり、新たに「国民」を再生産することに通じていることは重く受け止めねばならない。「国文学」「国語学」「国史学」等と並んで、「日本思想史学」も決して他人事ではない。

近年では、このような国民国家論の提出した知見を背景としながらも、国民国家の枠組では捉えきれない現象を分析する方向で、国民国家論の再検討が進んでいる。すなわち、国家よりも小さい単位として地方が注目され、また逆に国家を越えた単位では帝国論や世界システム論が盛んである。国民国家の神話